

社会的スキル遂行不安尺度の作成

大石 千歳*・相川 充

教育心理学**

(1995年10月30日受理)

問 題

孤独感の生起メカニズムについては、さまざまな立場から言及がなされている(例えば, McWhirter, 1990など)。それらの1つに, 社会的スキル欠如仮説がある。これは, 孤独感の発生, 発展に影響する要因として, 社会的スキルの欠如を挙げる立場である(Sptzberg & Hurt, 1987など)。

このような, 孤独感の原因が社会的スキルの欠如そのものによるという説に対して, Solano & Koester (1989) は, 社会的スキルの欠如とは別に, 自分の社会的スキルの程度に関する不安という要因を考えた。この考えを検証するために彼女らは, 孤独感に及ぼす社会的スキルの程度と, コミュニケーション懸念の関連を検討した。ここでのコミュニケーション懸念は, 社会的スキル遂行への不安を表すものとして用いられた。その結果, 孤独感に及ぼす社会的スキルの主効果も, コミュニケーション懸念の主効果も, ともに有意であり, 両要因は相互に独立しているという結果を得た。つまりこの結果は, 社会的スキルの遂行能力そのものばかりでなく, 自分の社会的スキルに関する不安も孤独感に影響を及ぼしていることを示しているのである。

他方, 対人不安と社会的スキルに関する研究においても, 対人不安の発生, 増大の原因として社会的スキルの欠如を考える社会的スキル欠如仮説がある。Arkowitz, Hinton, Perl, & Himadi (1978) は, 社会的スキルの乏しさが対人不安を引き起こす過程を次のように要約している。社会的スキルに欠けた人は, 他人からの肯定的な反応を少ししか受け

られない。また, その場にいる者全体にとってぎこちない状況を作り出してしまふ。こうして, 他人への自分の応答が満足でないという認識が対人不安を引き起こすのである。この過程において, 特に「他人に対する応答に自分が満足していないことが対人不安を引き起こす」という主張は注目に値する。仮に客観的には適切な対応ができていても, 本人が不満足ならば対人不安が生じるという主張だからである。つまり, 他者から低い評価を受けることへの懸念が対人不安に重要な影響力を持つわけである。

この主張はSchlenker & Leary (1982) の対人不安に関する自己呈示理論 (the self-presentation approach to social anxiety) にも認められる。この理論では, 対人不安は, 他者に特別な印象を与えたいと動機づけられているが, そうできるかどうか疑問を持った結果, 他者から不満足な対応を受けるのではないかと予測したときに生じると考えられている。自分が他人に与えるであろう印象に関する不安や, 他人が自分に下す評価に対する懸念が, 対人不安の原因であるとの主張である。

以上のような, 孤独感と社会的スキルに関する研究および, 対人不安と社会的スキルに関する研究の主張を考慮に入れると, 孤独感や対人不安という対人的不適応状態には, 社会的スキルの遂行それ自体とともに, 社会的スキルの遂行能力に対する不安も強く関与していると仮定できる。そこで本研究では, 自己の社会的スキルの遂行能力に関する不安を社会的スキル遂行不安 (anxiety over social skills performance) と命名し, これを測定する尺度の作成を試みる。つまり本研究の目的は, 社会的スキル遂行不安尺度の作成および, その信頼性と妥当性を

* 筑波大学大学院

** 東京学芸大学 (184 小金井市貫井北町 4-1-1)

検討することである。

アーシル (1972) によれば、社会的スキルは、知覚、翻訳、対人反応の3段階に分けて捉えることができる。これに対応させて考えると、社会的スキル遂行不安とは、相手の対人行動を知覚し、適切な対人行動に翻訳した後、実際の対人行動を起こす段階で生起する、「自分は対人行動を適切に、しかも効果的に遂行できるだろうか」という否定的な予測のことである。あくまでも、対人反応の遂行に対する不安であり、その人の実際の社会的スキルの適切さ、客観的实力とは、必ずしも関連しないものと仮定する。

なお、従来、社会的スキルの程度を自己評定によって測定する尺度が作成されている (Riggio, 1989; 菊池, 1988など)。しかし、社会的スキルが対人行動で表現されることを考慮すると、社会的スキルの自己評定尺度が本当に遂行能力を測定しているかどうか疑問である。社会的スキルの知識があることと、実際の遂行能力とは同じものではないからである。また、社会的スキルの遂行能力の高い者が、必ずしも正確に自己の社会的スキルの程度を認知しているとは限らないからである。従来 of 社会的スキルの自己評定尺度は、本研究の立場からすると、社会的スキルの遂行能力を測定しているというよりも、むしろ社会的スキルの遂行に対する“不安の低さ”を測定しているのではないかと考えられる。本研究では、この点に関しても、社会的スキル遂行不安尺度と従来 of 社会的スキルの自己評定尺度との関係を調べることによって検討を加えたい。

第一調査

目的

第一調査の目的は、社会的スキル遂行不安の程度を測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性の検討を行うことである。

妥当性の検討に用いる各概念と社会的スキル遂行不安との理論的関連は、次の通りである。

孤独感：既に述べたように、Solano & Koester (1989) は、孤独感と社会的スキルの関連についての研究の中で、社会的スキルの実力そのものよりも、自分の社会的スキルに対する主観的な不安が、孤独感に影響を与えていると述べている。また、Adams, Openshaw, Bennion, Mills, & Noble (1988) は、UCLA 孤独感尺度を因子分析して孤独感を3つの類型に分けた。そのうちの1つは、社会的スキル訓練によって低減させることはできないもので、社会的スキルよりも深い情動的な過程に規定される孤独感である可能性を示唆している。さらに、Cutrona

(1982) は、孤独感は量的、客観的な他者との関わりよりむしろ、他者との関わりに対する認知と満足度に関連していると指摘している。以上のような見解より、社会的スキル遂行不安と孤独感の間には、正の相関が予想される。

対人不安およびシャイネス：「問題」で述べたように、対人不安の自己呈示理論は、他者に与えるであろう印象に対する懸念が、対人不安の原因となっていると主張しているが、この懸念は、自分の社会的スキルの遂行に対する不安が引き起こしていると考えられる。つまり、社会的スキル遂行不安と対人不安の間には、高い正の相関があると予想される。

ところで、Buss (1980) は、対人不安の下位概念として、シャイネス、聴衆不安、困惑、恥を挙げている。また、Cheek & Buss (1981) のシャイネス尺度や、Zimbardo (1977) のスタンフォード・シャイネス調査は、対人不安の測定に頻繁に用いられている (リアリィ, 1990)。さらに、Leary & Schlenker (1981) もシャイネスを対人不安の一形態としている。このように、シャイネスは対人不安の中核的概念であるので、本研究では対人不安とともに、シャイネスも取り上げたい。

セルフ・エフィカシー：Craske & Craig (1984) や Kendrick, Craig, Lawson & Davidson (1982) らは、セルフ・エフィカシーが上昇すると不安反応の制御がしやすくなると指摘している。不安の一種である社会的スキル遂行不安と、セルフ・エフィカシーの間には、負の相関が予想される。また、Gresham (1984)、Lee (1983) はセルフ・エフィカシーの上昇は主張反応や社会的スキルの獲得を促進すると述べており、この点からも、社会的スキル遂行不安とセルフ・エフィカシーの間には、負の相関が予想される。

自尊感情：対人不安と自尊心が深い関連を持つことは、多くの先行研究において指摘されている。Leary (1983) は、対人不安と自尊心の負の相関を示した。リアリィ (1990) は、対人不安と自己評価が負の相関を持ち、他者が自分を好意的に評価しないと予期したとき、自尊心の低さが対人不安を発生させるとしている。社会的スキル遂行不安と対人不安との関連については前述の通りなので、社会的スキル遂行不安と自尊感情の間にも負の相関が予想できる。

自己評定による社会的スキルの程度：「問題」で述べたように本研究では、社会的スキル遂行不安と、自己評定による社会的スキルとの関係を検討する。社会的スキル遂行不安と社会的スキルの自己認知の間には、負の相関が予想される。

方法

1. 社会的スキル遂行不安原尺度の作成

(1)Riggio (1989) の Social Skills Inventory (SSI) 改訂版では、社会的スキルを構成する6つの下位スキルを採用している。社会的スキル遂行不安原尺度の作成作業を進めるために、社会的スキル遂行不安をこれらの6つの下位スキルの遂行能力に関する不安と暫定的に定義した。6つの下位スキルは順に、「情緒の表出性」(非言語的に情緒を表出する)、「情緒の感受性」(非言語的な情緒の表出を受け取る)、「情緒の統制性」(非言語的な情緒の表出を統制する)、「社会的表出性」(言語的に情緒を表出する)、「社会的感受性」(言語的な情緒の表出を受け取る)、「社会的統制性」(言語的な情緒の表出を統制する)である。社会的スキル遂行不安原尺度の原型として、Riggio (1989) の尺度を選んだ理由は、この尺度の持つ6つの下位次元が、社会的スキル全体を偏りなく含むからである。アメリカの尺度を原型にしたのでは、日米の文化差が影響する恐れもあったが、日本で作成された幾つかの社会的スキル尺度は、広範な社会的スキルの中の特定の部分に焦点をあてたものであり、広範な社会的スキルへの不安を検討する本研究の目的に適するものではないと判断した。

(2)SSI改訂版を日本語訳し、これをスキルの実力ではなく、スキルに対する不安を測る項目となるよう修正した。SSI改訂版には、上記の6つの下位尺度ごとに15項目、計90項目があるが、今回は、実施上の都合や最終尺度の簡便性を考慮して、各下位尺度について6項目、計36項目を「社会的スキル遂行不安原尺度」とした。各下位尺度につき3項目ずつ、計18項目は逆転項目とした。

2. 妥当性を検討するための既存の尺度

孤独感に関しては、Russell, Peplau, & Cutrona (1980) の改訂版 UCLA 孤独感尺度の邦訳版(工藤・西川,1983)を用いた。

対人不安に関しては、リアリィ (1990) の対人不安感尺度を用いた。シャイネスに関しては、相川 (1991) のシャイネス尺度を用いた。このシャイネス尺度は、Leary (1986) の定義に基づき、対人行動の障害となる状態を表わす項目から成る。

セルフ・エフィカシーに関しては、坂野・東條 (1986) の一般的セルフ・エフィカシー尺度を用い、自尊感情に関しては Rosenberg (1978) の尺度を翻訳した瀬谷 (1993) の文章を使用した。

社会的スキルの自己評定尺度としては、我が国でしばしば用いられている菊池 (1988) の KiSS-18 を用いた。

3. 質問紙の作成

社会的スキル遂行不安原尺度とともに、上記の各尺度を含む質問紙を作成した。フェイス・シートには専攻、学生番号、名前、性別、電話番号を載せた。専攻、学生番号、名前は第二調査として再検査を行うためのものである。

4. 回答者および手続き：上記の質問紙を東京学芸大学の2年生749人(男325人、女420人、不明4人)に一般教養の英語の授業の時間を用いて実施した。

結果と考察

1. 社会的スキル遂行不安尺度の作成

(1)社会的スキル遂行不安原尺度の合計得点の上位25.2%群(91点以上)と下位24.8%群(76点以下)によるGP分析を行った。すべての項目について上位群と下位群の間に有意差が存在し、削除項目はなかった。(2)回答の偏りのある項目を見いだすために、36項目全てに関して1項目ずつ得点の分布を算出し、棒グラフを描いた。各項目とも、著しく偏った分布を示すものではなく、削除項目はなかった。

(3)社会的スキル遂行不安原尺度の中から、尺度全体の内的整合性を低める項目を削除するために、主成分分析を行った。固有値1.0を基準とし10個の因子が抽出され、第1因子が社会的スキル遂行不安であると考えられた。第1因子の因子負荷量が.300以上の項目を残し、他の項目を削除したところ、26項目が残った。

(4)内的整合性の高い項目選定に万全を期するため、社会的スキル遂行不安原尺度の各項目得点と、当該項目を除いた全体得点との相関係数の値が.300未満の項目を削除した。より厳しい基準による項目選択である、この手続きにより残った22項目を採用した。

(5)上記の22項目について、内部構造を確かめ下位尺度に分割するために、因子分析(主因子法バリマックス回転)を行い、5因子を抽出した。第4、第5因子については、属する項目数が少なく、下位尺度としての実用性に欠けるので、最終尺度からは削除した。その結果、社会的スキル遂行不安尺度(以下ASSP尺度と略す)は、3因子構造を有する、全19項目の尺度となった。

(6)上記の19項目に対して、改めて因子分析を行ったところ、22項目での因子分析と全く同じ構成項目による3因子構造が得られた。

(7)完成したASSP尺度の各下位尺度の項目構成を検討した(表1参照)。第1因子を構成する項目内容は、会話をするスキル、表情に関するスキル、相手の体に触れるスキル、他人と協調できるスキルであ

だったので、「自己表出不安」と命名した。第2因子は、自分の感情を統制、または隠すスキル、表情や対人的相互作用を自然に保つスキル、他者の情緒に対する感受性を示す項目が集まった。そこで「情緒統制不安」と命名した。第3因子は、リーダーシップを発揮するスキル、場面の雰囲気呑まれず堂々としていられるスキルを示す項目が集まったので「リーダーシップ発揮不安」と名づけた。これらの3因子をASSP尺度の3つの下位尺度とした。

2. ASSP尺度の信頼性および妥当性の検討

(1)ASSP尺度の得点について:749人のASSP尺度および各下位尺度の得点の平均値、標準偏差は表2の通りである。

(2)ASSP尺度の正規性の検定:ASSP尺度の得点の分布の状況を調べ、正規分布性の検定を行った。検定方法はK-S検定(Kolmogorov-Smirnov Goodness of Fit Test)を行い、K-S $Z=1.174$, $p=.127$ (両側検定。10%水準でも n.s.) であった。この検定は、

帰無仮説を「当該の分布は正規分布と異なる分布ではない」とするものであり、帰無仮説が棄却されなかったので、ASSP尺度の分布状況は、正規分布と見なせる。ASSP尺度の得点の分布状況は、図1の通りである。

(3)ASSP尺度全体および各下位尺度の信頼性の検討:ASSP尺度全体でのCronbachの α 係数と、各下位尺度ごとの α 係数を算出し、内的整合性を確認した(表2参照)。ASSP尺度全体の α 係数は、ASSP原尺度の α 係数.836より大きい値となり、項目選定による尺度の内的整合性の上昇を意味している。下位尺度の中では、第1因子が最も高い値、次いで第2因子、第3因子の順となった。 α 係数は尺度の項目数が少ないほど低い値となることも、この結果の原因と考えられる。

(4)既成の尺度の信頼性の確認:構成概念妥当性の検討のために諸尺度を用いたが、シャイネス尺度(相川,1991)以外は、因子分析を行い信頼性を確認した。

表1 ASSP尺度の項目分析結果

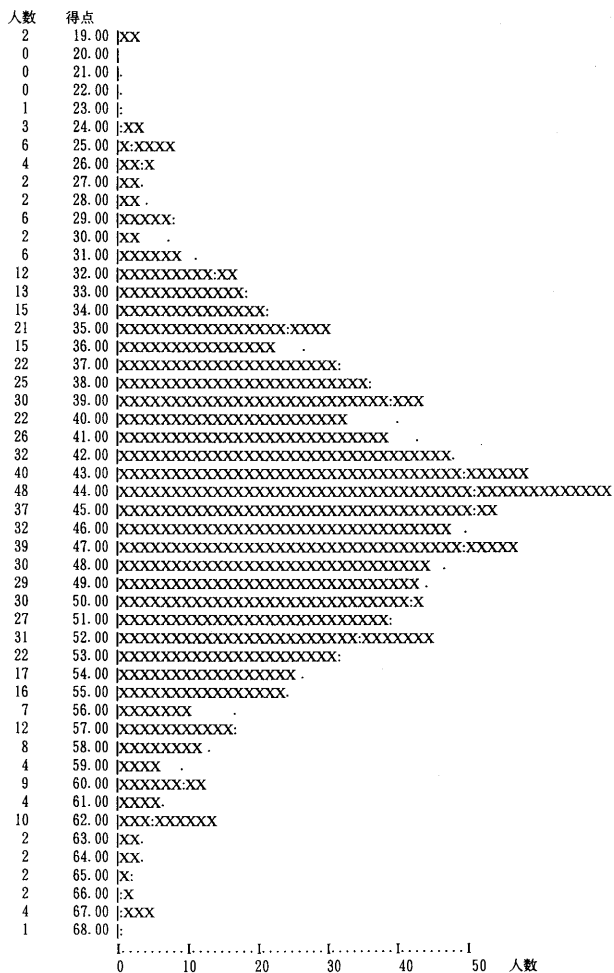
	GP分析 のt値	原尺度の 主成分分析 第一主成分 の負荷量	当該項目 と全体の 相関係数	当該項目 を除いた α 係数	19項目による因子分析の因子負荷量		
					第一因子	第二因子	第三因子
第一因子「自己表出不安」							
* 2. パーティ(コンパ、飲み会)で、私に関心を示した人とすぐに会話できるだろう。	-15.39	.546	.457	.828	.541	.130	.181
13. 私は、友人に無口と言われてしまいそうだ。	-13.91	.536	.430	.829	.537	.218	.105
16. パーティ(コンパ、飲み会)で、ほかの人と楽しい会話ができないのではないと思う。	-17.43	.654	.551	.826	.505	.376	.209
* 8. 人に自分から進んで自己紹介できると思う。	-15.55	.597	.500	.827	.500	.125	.324
* 5. ひょうきん者を装うのが得意だ。	-11.18	.426	.363	.831	.490	.043	.095
* 11. 常に表情豊かで見られると思う。	-10.83	.456	.375	.831	.479	.087	.064
* 17. たくさんの人と一緒に働くような仕事には自信がある。	-13.33	.522	.431	.830	.464	.072	.229
* 14. 落ち込んだ人を抱きしめたり、体に触れてあげられると思う。	-10.39	.415	.360	.831	.454	-.034	.131
第二因子「情緒統制不安」							
4. 自分の表情が自然かどうか気になってしまう。	-10.03	.411	.341	.832	.078	.607	.027
7. 人とのつきあい方が不器用なのではないかと悩む。	-14.92	.579	.483	.828	.229	.564	.203
15. 感受性と理解力のある人間だと人から思ってもらえるかどうか心配だ	-9.94	.439	.368	.831	.080	.535	.146
10. 自分の感情をうまくコントロールできないのではないかと不安に思う	-10.06	.362	.319	.833	-.107	.512	.222
18. 自分の感情を表に出せないのではないかと不安だ。	-13.13	.511	.414	.830	.333	.488	.012
19. 他人のことにに関して喜んだり苦しんだりできないのではないかと不安に思う。	-12.65	.439	.388	.831	.147	.426	.077
1. 相手を嫌っているのを、隠そうとしても見破られてしまいそうで怖い。	-10.00	.334	.305	.833	.022	.365	.133
第三因子「リーダーシップ発揮不安」							
* 3. 集団での討議をうまくリードできると思う。	-17.05	.626	.535	.826	.340	.107	.714
12. グループのリーダーに選んでもらえる自信はない。	-14.42	.569	.489	.828	.210	.212	.589
6. 議論の時、たくさん発言できる自信はない。	-13.13	.536	.438	.829	.226	.227	.558
* 9. 重要人物がたくさん参加するようなパーティでも、自分のことを場違いだとは思わないだろう。	-9.69	.441	.365	.831	.159	.232	.356

注1) *印は逆転項目。項目は各因子への因子負荷量の多い順に並んでいる。項目番号はASSP尺度の項目番号である。

注2) GP分析では、すべての項目が1%水準で有意であった。

注3) 主成分分析の第一主成分の寄与率は16.9%、19項目の因子分析での各因子の寄与率は第一因子から順に26.4%、10.1%、6.9%であり、累積寄与率は3因子で43.3%である。

図1 ASSP尺度の得点の分布状況



注1:749人中、欠損値を含む者17名を削除した732人によるグラフである。
 注2:ヒストグラムは実際のデータの分布を、点線は正規分布を示している。

UCLA孤独感尺度では、「情緒的孤独感」,「対人的ネットワークの欠如」,「他者との共通点の欠如」,「社会的行動の欠如」と命名できる4因子が抽出された。項目9はどの因子にも負荷が低かったので削除した。

対人不安感尺度は「聴衆不安」,「相互作用不安」,「初対面場面への不安」,「シャイネス」,「対人場面での自信欠如」と命名できる5因子構造であった。削除項目はなかった。

一般的セルフ・エフィカシー尺度では「失敗に対する不安」,「行動の積極性」,「能力の社会的位置づけ」と命名できる3因子が得られ、削除項目はなかった。

表2 ASSP尺度の得点

	平均値 / 満点	標準偏差	人数	α係数
ASSP尺度全体(19項目)	44.93/ 76.00	8.30	732	.838
第一因子「自己表出不安」(8項目)	18.74/ 32.00	4.26	739	.764
第二因子「情緒統制不安」(7項目)	15.36/ 28.00	3.72	738	.723
第三因子「リーダシップ発揮不安」(4項目)	10.83/ 16.00	2.52	743	.727

自尊感情尺度は「他者に対する優越性」,「自己の有用性の認識」と命名できる2因子構造となり、削除項目はなかった。

KiSS-18の因子分析では「職務遂行スキル」,「言語的相互作用スキル」,「情緒的相互作用スキル」と命名できる3因子が抽出された。項目16はどの因子にも因子負荷量が低かったので削除した。

以上の全ての尺度のα係数を算出したところ、すべて.800以上となり信頼性が裏付けられた。

(5)ASSP尺度の構成概念妥当性の検討:構成概念妥当性を検討するために、ASSP尺度と、諸尺度およびその下位尺度との相関係数を算出した。結果は、表3に示した通りである。

全ての尺度において予想通りの方向に有意な相関係数が認められた。正の相関が認められたのは、孤独感尺度、シャイネス尺度、対人不安感尺度であり、負の相関が認められたのは、一般的セルフ・エフィカシー尺度、自尊感情尺度、KiSS-18であった。

ASSP尺度と諸尺度の下位尺度との関係を「比較的強い相関がある」と一般に言い慣わしている $r > .400$ を目安に検討すると、孤独感に関しては、「情緒的孤独感」および「対人的ネットワークの欠如」との間には、強い相関が認められたが、「他者との共通点の欠如」,「社会的行動の欠如」との間には、弱い相関しか認められなかった。この2つの下位尺度以外は、いずれもASSP尺度との間に「比較的強い相関」($r > .400$)が認められた。

ASSP尺度とKiSS-18との相関は、-.703と、高い負の相関となった。本研究では、社会的スキルの程度を自己評定すること自体が、社会的スキルに対する自信や不安を測定していることになるのではないかと考えている。ASSP尺度得点とKiSS-18とが高い負の相関となったことは、ASSP尺度が社会的スキルに対する不安を測定しているのに対して、KiSS-18は、社会的スキルに対する自信を測定していると解釈することができる。なお、KiSS-18の第3因子、「情緒的相互作用スキル」だけが、他の2つの因子よりも、ASSP尺度との相関が低かった。これは社会的スキル遂行不安が、職務遂行や言語的相互作用など具体的なスキルへの不安を示す概念であることを示唆していると考えられる。

(6)ASSP尺度の下位尺度の内容検討:ASSP尺度の第1因子、「自己表出不安」と特に高い正の相関があったのは、シャイネス尺度、対人不安感尺度第4因子「シャイネス」であり、高い負の相関があったのは、一般的セルフ・エフィカシー尺度第2因子「行動の積極性」、KiSS-18第2因子「言語的相互作用スキル」であった。シャイネスは、自己表出の妨げにな

表3 ASSP尺度と他の諸尺度の相関係数

	ASSP尺度 (全体)	第一因子 (自己表出 不安)	第二因子 (情緒統制 不安)	第三因子 (リーダーシップ 発揮不安)
改訂版 UCLA 孤独感尺度	.503 ***	.501 ***	.346 ***	.296 ***
第一因子	.409 ***	.397 ***	.287 ***	.249 ***
第二因子	.512 ***	.482 ***	.386 ***	.300 ***
第三因子	.186 ***	.277 ***	.060	.058
第四因子	.392 ***	.420 ***	.212 ***	.266 ***
シャイネス尺度	.727 ***	.729 ***	.415 ***	.549 ***
対人不安感尺度	.658 ***	.473 ***	.549 ***	.551 ***
第一因子	.553 ***	.393 ***	.418 ***	.537 ***
第二因子	.493 ***	.317 ***	.459 ***	.405 ***
第三因子	.517 ***	.410 ***	.456 ***	.332 ***
第四因子	.570 ***	.530 ***	.390 ***	.401 ***
第五因子	.517 ***	.303 ***	.544 ***	.380 ***
一般的セルフ・エフィカシー尺度	-.641 ***	-.486 ***	-.477 ***	-.582 ***
第一因子	-.422 ***	-.227 ***	-.452 ***	-.332 ***
第二因子	-.599 ***	-.529 ***	-.360 ***	-.545 ***
第三因子	-.443 ***	-.359 ***	-.262 ***	-.465 ***
自尊感情尺度	-.532 ***	-.349 ***	-.462 ***	-.475 ***
第一因子	-.505 ***	-.427 ***	-.310 ***	-.481 ***
第二因子	-.425 ***	-.208 ***	-.456 ***	-.370 ***
KiSS-18	-.703 ***	-.616 ***	-.460 ***	-.594 ***
第一因子	-.507 ***	-.351 ***	-.398 ***	-.485 ***
第二因子	-.717 ***	-.703 ***	-.419 ***	-.553 ***
第三因子	-.544 ***	-.489 ***	-.340 ***	-.461 ***

注1) *印は $p < .05$, **印は $p < .01$, ***印は $p < .001$

り、自己表出不安が高い者は、行動の積極性や言語的相互作用スキルの自己評価は低いのであろう。

ASSP尺度の第2因子「情緒統制不安」と特に高い相関があったのは、対人不安感尺度の第2因子「相互作用不安」、同じく第3因子「初対面場面への不安」、同じく第5因子「対人場面での自信欠如」、自尊感情第2因子「自己の有用性の認識」、一般的セルフ・エフィカシー尺度第1因子「失敗に対する不安」であった。このような結果は、いずれも「情緒統制不安」と関連するものと予測されるものである。中でも、「対人場面での自信欠如」や「失敗に対する不安」との相関は、対人場面で相手により印象を与える自信がなく、失敗を恐れる気持ちが情緒の統制を大きく乱すと考えられる。

ASSP尺度の第3因子「リーダーシップ発揮不安」と特に相関があったのは、シャイネス尺度、対人不安感尺度の第1因子「聴衆不安」、一般的セルフ・エフィカシー尺度第2因子「行動の積極性」、KiSS-18第2因子「言語的相互作用スキル」であった。これらの因子は、いずれもリーダーシップを発揮する

不安と理論的に相関があると予測されるものである。例えば、適切なリーダーシップの発揮には、多くの人間を前にして話が上手にできることが重要だが、聴衆不安の高い者は、自己のリーダーシップの発揮に自信が持てないであろう。また、リーダーシップの発揮と、積極的な行動がとれることとの関連は深いはずである。

以上のように、ASSP尺度のどの下位尺度も、構成概念妥当性が認められたと考えられる。

第二調査

目的

第一調査により作成されたASSP尺度の再検査信頼性を検証する。

方法

第一調査から4カ月後に、第一調査に参加した回答者の一部(男子46人、女子49人、計95人)にASSP尺度を実施し、第一調査と第二調査の得点の相関係数を算出した。第一調査と同じ尺度であることを気づかせないため、質問紙の題名は「青年の人間関係について」とした。

結果と考察

第一調査のASSP尺度得点と第二調査のASSP尺度得点の相関係数は $r = .773$, $p < .001$ であった。 r の値が.800に近いので、ASSP尺度は時間の経過による得点の変化が生じにくい、再検査信頼性の高い尺度といえる。

総合的考察

本研究では、36項目から成る社会的スキル遂行不安を測定する原尺度から、内的整合性の高い19項目を残し、3つの下位尺度から構成されるASSP尺度を作成した。

ASSP尺度の信頼性の高さは、クローンバックの α 係数による内的整合性、および再検査相関係数による安定性によって確認された。また、妥当性については、関連が予想される他の諸尺度との相関係数によって、構成概念妥当性が検証された。

今後の研究課題として、ASSP尺度の基準関連妥当性、および行動的妥当性の検討が必要であらう。ただし、社会的スキル遂行不安という概念は、本人が主観的に抱く不安であり、何を基準として基準関連妥当性を確認するかは十分に考慮する必要がある。行動的妥当性に関しても、そもそもASSP尺度

が、個人の行動とは独立の、主観的な不安を扱っているため、検証方法の工夫が必要である。

例えば、社会的スキル遂行不安が社会的スキルの実際の実力と独立か否かを検討するには、社会的スキル遂行不安の高低2群と、社会的スキルの適切性の上位群、下位群との組み合わせにより、被験者が4群に分かれるという仮説を立て、この検証を試みる手段が考えられる。この仮説の検証には、客観的なスキルの程度を測定しなければならないが、そのためには、被験者に様々な社会的場面を想定したロールプレイをさせ、その様子をビデオ録画して第三者に評定させるなどの工夫が考えられる。

いずれにしろ今後は、ASSP尺度を用いて多くの研究が蓄積され、「社会的スキル遂行不安」という概念が確立されなければならない。この概念が確立されれば、新たな観点から孤独感や対人不安の低減に関する研究を分析することが可能となろう。

引用文献

- Adams, G.R., Openshaw, D.K., Bennion, L., Mills, T., & Noble, S. 1988 Loneliness in late adolescence: A social skills training study. *Journal of Adolescence Research*, 13, 81-96.
- 相川 充 1991 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 *心理学研究*, 62, 149-155.
- アーシル, M. 辻 正三・中村陽吉(訳) 1972 対人行動の心理 誠信書房
- Arkowitz, H., Hinton, R., Perl, J., & Himadi, W. 1978 Treatment strategies for dating anxiety in college men based on real-life practice. *The Counseling Psychologist*, 7, 41-46.
- Buss, A.H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman.
- Cheek, J.M., & Buss, A.H. 1981 Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 330-339.
- Craske, M.G., & Craig, K.D. 1984 Musical performance anxiety: The three-system model and self-efficacy theory. *Behaviour Research and Therapy*, 22, 267-280.
- Cutrona, C.E. 1982 Transition to college: Loneliness and the process of social adjustment. In L.A. Peplau & D. Perlman(Eds.) *A sourcebook of current theory research and therapy*. Pp.291-309, Wiley.
- Gresham, F.M. 1984 Social skills and self-efficacy for exceptional children. *Exceptional Children*, 51, 253-261.
- Kendrick, M.J., Craig, K.D. Lawson, D.M., & Davidson, P.O. 1982 Cognitive and behavioral therapy for musical-performance anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 50, 353-362.
- 菊池章夫 1988 *思いやりを科学する* 川島書店
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究 (I) - 孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討 - *実験社会心理学研究*, 22, 99-106.
- リアリィ, M.R. 生和秀敏(訳) 1990 対人不安 北大路書房
- Leary, M.R. 1983 Social anxiousness: The construct and its measurement. *Journal of Personality Assessment*, 47, 66-75.
- Leary, M.R. 1986 Affective and behavioral components of shyness: Implications for theory, measurement, and research. In W.H. Jones, J.M. Cheek & S.R. Briggs(Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment*. Pp.27-38. New York: Plenum Press.
- Leary, M.R., & Schlenker, B.R. 1981 The social psychology of shyness: A self-presentational model. In J.T. Tedeschi(Ed.), *Impression management theory and social psychological research*. New York: Academic Press.
- Lee, C. 1983 Self-efficacy and behaviour predictors of subsequent behaviour in an assertiveness training programme. *Behaviour Research and Therapy*, 21, 225-232.
- McWhirter, B.T. 1990 Loneliness: A review of current literature with implications for counseling and research. *Journal of Counseling and Development*, 68, 417-422.
- Riggio, R.E. 1989 *Social skills inventory manual*. Consulting Psychologists Press.
- Rosenberg, M. 1978 *Conceiving the Self*. Basic Books.
- Russell, D., Peplau, L.A., & Cutrona, C.E. 1980 The Revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- 坂野雄二・東條光彦 1986 一般的セルフ・エフィカシー尺度作成の試み *行動療法研究*, 12, 73-82.
- Schlenker, B.R., & Leary, M.R., 1982 Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669.
- 瀬谷正敏 1993 社会心理学における自己測定尺度 ソフィア Pp.17-25, 61-65.
- Solano, C.H., & Koester, N.H. 1989 Loneliness and communication problems: Subjective anxiety or objective skills? *Personality and Social Psychology Bulletin*. 15, 126-133.
- Spitzberg, B.H. & Hurt, H.T. 1987 The relationship of interpersonal competence and skills to reported loneliness across time. *Journal of Social Behavior and Personality*, 2, 157-172.
- Zimbardo, P. G. 1977 *Shyness: What it is, what to do about it*. Massachusetts: Addison-Wesley.

A Study on Constructing a Scale of Anxiety over Social Skills Performance

Chitose OHISHI & Atsushi AIKAWA

Department of Educational Psychology

The purpose of this study was to construct a scale to measure anxiety over social skills performance (ASSP) and to examine the reliability and validity of the scale. The questionnaire which contained the original version of ASSP scale and the other psychological measures thought to be theoretically correlated with ASSP was made. Seven hundreds and forty nine college students completed the questionnaire. Through GP analysis, principal component analysis, and item-total correlation, 22 items were selected. Furthermore, by factor analysis (principal axis factoring), 19 items were chosen for the final ASSP scale and were separated into 3 subscales. The reliability of ASSP scale was established by the internal consistency ($\alpha = .838$). And the validity of the scale was confirmed by the following results. (1) ASSP scale was positively and extremely correlated with measures of shyness and social anxiety, and moderately correlated with UCLA loneliness scale. (2) Negative correlations were observed between ASSP scale and measures of self-efficacy and self-esteem. Finally, high test-retest reliability was shown ($r = .773$).